

平成20年度質の高い大学教育推進プログラム審査結果表【選定】

機 関 名	北海道大学				
取 組 名 称	博物館を舞台とした体験型全人教育の推進				
取組学部等	総合博物館				
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取組				
整 理 番 号	A21002	申 請 の 形 態	単 独	取 組 期 間	3 年
申請の分類	体験活動	地域活性化	環境教育		
キーワード	大学博物館, 実物教育, 体験型教育, 地球環境, エコキャンパス				

＜選定理由＞

本取組は、地球環境の保全と人類の文化を継承する意義について理解を深める視点から、大学が有する自然環境、多様な生物、文化的遺産を集積した博物館等を利用し現実の対象物に根ざした実物教育・体験型教育活動を展開する中で、全人教育を目指している。

従来、北海道大学では一般教育演習として「北大エコキャンパスの自然と歴史」を開講し、文理融合型の実習、演習形式を大学博物館を含む全キャンパスを利用し展開していたが、これをより充実させ、さらにこれまで博物館が一般市民向け講座として開講している「パラタクソノミスト（準自然分類学者）養成講座」を学生版として開講することにより学生の主体的な学び、博物学への関心、環境への配慮と市民との交流を生み出す契機となる点は評価できる。そこでは博物館所有の物品の分類整理を通じ、本物のなんたるかを理解し、得た知識と知見を大勢の人に理解してもらう工夫、発表の方法等、学生が社会人として成長していくためのチャンスを提供するプログラムであり、全人教育実現の一環を担うこととなる。

取組の実施に当たっては、大学が持つ多くの貴重な資料を単なる展示に終わらせず、幾つかの資料を組み合わせることにより、北海道あるいは自然環境が良く理解できる、「みせかた」についてもデザイン力を高める努力をして欲しい。

取組の概要【1 ページ以内】

大学博物館が持つ膨大な学術標本・資料と本学キャンパスが持つ豊かな自然・文化資源を活用した、バーチャルではない「実際のもの」に根ざした実物教育・体験型教育活動を展開する。博物館に集う様々な研究分野の教員が、専門と学年を横断する総合的なカリキュラムの下で学生を指導する教育プログラムである。これは、専門縦割り型で学年毎に切り分けられがちな既存の教育ではなしがたい、新たな全人教育の取組である。さらに、一般市民が自由に集まる大学博物館という場を生かした、オフカリキュラムによる実践的教育プログラムも用意する。具体的な実施計画の概要は以下の2点にまとめることができる。

1) キャンパスの自然・文化資源を活用した体験型環境教育プログラム：

北大キャンパスが擁する原生林に生息する植物・鳥類・昆虫類などの生物多様性、先住民族遺跡群の保存庭園、重要文化財に指定されている歴史的建造物群などの調査・学習を通して、北大の歴史とキャンパスの豊かさを実感し、地球環境の保全と人類の文化を継承することの意義について理解を深める。さらに、そうして学んだことを一般市民に伝えることができる学生を養成する。教育方法はこれまで開講してきた一般教育演習「北大エコキャンパスの自然と歴史」を雛形とし、文理融合型の実習・演習形式をより充実・発展させる。大学博物館を含むキャンパス全体をサステイナブル・キャンパスとして教育用に整備し、全学教育や各学部が独自に開講する多数の関連授業や演習においてもその利用を促進する。地域活性化の一翼を学生に担わせるため、市民向けエコキャンパス・ツアーの計画・運営を学生に行わせる。相互評価や市民からの評価を通してさらなる活動に反映させ、地域の課題解決の実践にもつなげる。

2) 大学博物館を中心に据えた実物教育プログラム：

ア) 博物館に保存されている 400 万点に上る学術標本・資料の同定・整理・体系づけができる能力を育て、実物を通じて地球環境と生物多様性について深い知識を持った学生を養成する講座を開講する。これは、主に一般市民向けに開講されて大きな実績を挙げてきた「パラタクソノミスト(準自然分類学者)養成講座」の学生版として位置づけられる。

イ) 学芸員資格取得のために開講されている「博物館実習」を、博物館標本・資料の整理保管法から博物館展示手法や博物館マネジメントについて学ぶ、学生から院生までを含む学年横断型の実習プログラムとして充実させる。

ウ) 博物館の市民啓発活動に学生が参加するプログラムとして、博物館で開催されるサイエンス・カフェや展示の企画・運営に集中的に取り組ませる。これらは多数の市民や観光客が訪れる週末や夏季休暇に対応するため、オフカリキュラム・プログラムとする。キャンパス来訪者や博物館来館者と交流し、博物館の市民ボランティアとも協働する場を用意し、自主性を維持しながら協調性を発揮し、コミュニケーションやマネジメントを行う能力を育成する実践的教育とする。

以上の教育プログラムの各局面で、活動ポートフォリオを残し、学生が自ら活動を検証・評価し、常に改善点を導き出し、実践にフィードバックすることで更なる活動のモチベーションを持たせる。

なお本取組は、高年次における体験教育（サービスマーケティングやキャップストーン・プログラム）を展望した教育プログラムとして位置づける。これまでともすれば縦割りの専門教育に偏しがちだった総合大学の教育に、新たな広がりを与えるものと期待される。